言語研究センター共同研究

『良友』画報と上海租界研究

孫　　安石

本共同研究は1926年～1945年の間、上海で発行された『良友』画報の多様な内容を、専門領域を超えた学際的な視点からとらえ直すことを目指すものである。上海で発行された『良友』画報に関する研究成果としては、1930年代に同雑誌の編集を担当した馬国亮が出版した『良友懐旧』（2002年）が最新の先行研究である。しかし、中国以外の国ではまだこの画報を全面的に分析した研究は発表されていない。1926年に創刊された同雑誌は、中国の政治、経済、社会、文化はもちろん、文学、広告、漫画などあらゆる分野を網羅している。とくに、この画報が創刊された1920年代はアジアで大衆消費社会とも言うべき社会現象が幅広く見られた時期で、映画や百貨店などが登場する時期とも重なる。

本共同研究はこの『良友』画報を精読する輪読会を続けながら、2004年8月にはワークショップ「『良友』画報と上海」（上海）を開催し、2007年9月には雑誌『アジア遊学』に『良友』を取り上げた特集号（勉誠出版）を出版することができた。2010年1月には菊池敏夫「上海の百貨店業界と近代中国」（臨時研究会）を開き、8月には上海市檔案館、上海市図書館などを訪れ、『良友』画報関連の資料調査を行うことができた。

本年度は2012年7月8日に開催された公開ワークショップ「図画像資料研究の新しい可能性を求めて」（東洋文庫2Ｆ講演室）で研究会メンバーの森平崇文氏が「日本における中国画報研究の現状―『良友』画報を中心に」を報告し、研究会代表の孫安石（神奈川大）が問題提起を行った。また、10月11日の良友画報研究会では薛軼群（東北大学法学研究科GCOE特任フェロー）によって「近代中国の電気通信事業について―有線電報・無線電報を中心に」いうタイトルの報告が行われた。

＊・＊